人新世を耕す　⑫

帯広畜産大学　筒木潔名誉教授

子孫から大地借用

平和の民「ホピ族」の口伝

前回は人間が土に接する場合、それを「お借りしている」という謙虚な気持ち〝Humility〟が不可欠だという犬養道子さんの言葉を紹介した。

土を誰からお借りしているのかというと、人それぞれの世界観、宗教観、思想によって異なってくるが、ネイティブアメリカンのホピ族には次のような口伝が残っている。

「私たちのこの大地は親や祖先から相続したものではなく、私たちの子孫から借りているものである」（ホピの箴言＝しんげん＝教訓）。

私はドイツのハンブルク大学に博士研究員として留学していた頃、ハンブルク市の環境局発行の土地利用計画に関するパンフレットに書いてあったことからこのホピの口伝を知り、その後大学の講義の中でもこの言葉を伝えてきた。

生き物の存立基盤

パンフレットの中では、ホピ族のこの口伝は以下のように解説されていた。

「私たちは自然物としての土壌、水、空気が地上における全ての生き物の存立基盤であることを知っている。したがって、私たちはこれらの生存基盤をそこに存立する植物界や動物界とともに、注意深く保護し、育み、発展させていかなくてはならない（ハンブルク市環境局による解説）」

ホピ族はアメリカ合衆国アリゾナ州北部の6000㎢（参考：茨城県の面積6097㎢と同じくらい）の保留地に居住する人口約1万4000人の先住民である。「ホピ」とは彼らの言葉で「平和の民」という意味である。

ホピ族保留地の周辺（Google mapより）

ホピ族の人々は他の部族との争いを好まず、ロッキー山脈内でテーブルマウンテンを形成する標高1370～1680mの乾燥した地域にたどり着いた。

年間の降水量は150～250㎜で、雪融け水と夏のわずかな雨に依存している。他の部族も後からやってきた白人たちもこの土地に興味を示さなかったため、ホピ族は2000年近くもの年月この土地に留まることができた。彼らが耕す土地は有機物にも水分にも不足しており、利用にあたっては細心の注意が必要であったため、土地や土に対する謙虚な考え方が醸成されたものと推察される。

移動で地力低下補う

ホピ族は自給のために多種類の豆や4色のトウモロコシを栽培し、カボチャ、ウリ、アマランスその他多くの野菜も栽培している。トウモロコシは広い間隔で深く播種され、降水量が少ないにもかかわらず灌漑は行わず降雨と土壌水分のみに依

早生種を用いた秋どりの栽培。施設（ハウス）を利用して8月下旬～9月にかけて播種し、無加温または加温栽培よって、11～12月に収穫する作型。

誠意と確実の表徴
フタバ印
フタバ印のタネ
感動と満足の種子
埼玉県久喜市野久喜1－1
野原種苗株式会社
電話（0480）21－0002（代）
FAX（0480）23－5005
タネは1番・デンワは2番

ホピ族保留地の中心近くにある Kykotsmovi Village
（Google map より）

る。個々の圃場は0・4～0・8haと広くなく、毎年移動することにより地力低下を補ってきた。

肥料、除草剤や殺虫剤は従来使用されてこなかった。ヤギとヒツジの牧畜も以前には行われていたが、過放牧が土壌荒廃を起こすので、連邦土壌保全局の指導により現在は行われていない。

責任感ある接し方

ホピ族に限らずアメリカ先住民は口承によって民族の歴史や教訓・予言を伝えているが、バランスを失った現代の物質文明や世界大戦に関する警告が彼らの予言に含まれていたことから注目を浴びた。彼らの教訓や予言は、その厳しい環境下で育まれた謙譲、協力、尊敬、土地や自然に対する責任感ある接し方に基づくものである。

その後、彼らの居住地域周辺でウランや石炭などの地下資源が発見されたため、これらの採掘のために一時彼らの居住権が脅かされたが、採掘企業がホピ族に補償金を支払うことで合意した。

前述で紹介した伝統的な農法で耕される農地や農民の数は現在では著しく減少し、住民は主に公共事業や私企業での雇用労働によって生計を立てている。生活様式や食生活も著しく変化し、糖尿病や肥満を患う人々の割合が高くなっているとのことである。

ホピ族は多種類（1930年代の調査では47種類）の山菜を日々の食材と救荒食料としてきたが現在ではほとんど利用されていない（Johnson, Taiz Elizabeth, 2016. アリゾナ大学博士論文）。先住民族の知恵と文化が現代文明に飲み込まれていく状況はどこの国でも同様である。

「土」と「壌」の違い

土と生命の関係については、漢字の成り立ちにも表現されている。中国でAD100年頃、後漢の時代に著された「説文解字」という漢字辞典では「土」という字を次のように説明している。

「地之吐生生物者也。二象地之上、地之中、物出形也」

すなわち、地が生物を吐き出す様子を表している。「二」は地の上（表層土）と地の中（下層土）を示し、ここから物が出てくる形を表している。すなわち「土」という漢字は、土が生命活動と深く関連していることを表している。

他方「土壌」の「壌」は「柔土なり。塊なきを壌という」と説明されている。すなわち「壌」は土が熟して変化変質したものであり、耕地土壌を示している。

「説文解字」よりもさらに古く紀元前の周の時代に著された書「周礼」には「万物が自生するところすなわち〝土〟といい、人の耕して栽培するところすなわち〝壌〟という」と書かれている（「土と日本古代文化」、藤原、1991）。

今度は「生」という字の成り立ちを調べてみると（「説文解字」はインターネットで検索できる）「土」という字の中の「I」の画に「U」の字に似た画を重ねて、土から萌え出てきた木に枝や葉が繁る様子を表したものがその本来の形だったようである。すなわち「生」も「土」もほとんど同じ概念のもとに生まれた漢字であった。

人は土から生まれた

私は最初「生」という漢字を見ていて、これは「土」という漢字に「人」という漢字を重ねたものではないかと考えた。残念ながら「説文解字」ではそのような説明はしていなかったが「人は土から生まれた」ないし「人は土に生きる」という概念は人間の深層心理を反映するものとして不合理ではないと思う。

開催地　：
播種日　：2
定植日　：－
審査日　：2
特　長
べと病R1
草姿立性で
り良好。葉色
新鮮感があ
穫作業性良
秋冬まきに

▽問い合わ

※「pick u